



# セイレンの涙

見えない愛につながれて

ティファニー・ライス

藤峰みちか 訳

試し読み版  
【ザック編】



息をのむほどの美しさと淫らな作風で人気になり、  
何不自由ない暮らしをしているエロティカ作家のノーラ。

そんな彼女にも悩みがあった。

これまで普通の恋をしたことがないのだ。

歪んだ欲望のことなら15歳のときからよく知っているけれど、  
どうやったら愛し合ってしあわせになれるの……？

そんなとき、ハンサムな敏腕編集者ザックがノーラの新しい担当者として現れて……。

魅力的なキャラクターたちが繰り広げる、  
それぞれの愛と欲望の形——



ノーラ：  
エロティカ作家。  
心に闇を抱えている。



ザック：  
ノーラの新しい担当編集者。  
堅物で口が悪いが敏腕。  
ノーラに惹かれる。

~~〈ザック編〉を試し読み~~

彼女の才能を開花させる  
年上の男

すべてを教えてくれた

昔の恋人



ソルン：  
謎の多い人物。  
ノーラの初めての恋人。

~~〈ソルン編〉を試し読み~~

無垢な体を捧げようとする  
年下の学生



ウェスリー：  
ノーラ同居人。  
19歳の大学生。ノーラに  
一途な想いを寄せている。

~~〈ウェスリー編〉を試し読み~~

何  
ボクを削除した  
その理由は何ですか？  
さっぱりが！



ザックはたまに仕事が嫌いになる。編集作業そのものは好きだ。小説を立派に見せかけたり、実際に立派にしたり。だが駆け引きは嫌いだ。予算が足りなかったり、ベストセラーの売文屋のために、異彩を放つ中堅クラスの作家を下ろして場所を空けなければならなかったり。そしていまは、出版界の実力者に“自分には文芸小説の最高の編集者がふさわしい”と思いこませることに成功した、頭のいかれたポルノ作家に会うため、コネチカットくんだりまでやってきた。今日は仕事のほうがザックを嫌っているのを感じる。

ザックは、平凡な郊外に立つ風情のあるチューダー様式の二階建てコテージの前に、J・Pの車を停めた。住所と自分の位置を確認し、家を見つめる。ノーラ・サザリン——著作が翻訳されるのと同じくらいの頻度で発禁にされる、悪名高いエロティカ作家が、こんなおばあちゃんが好みそうな家に住んでいる？

重いため息をつき、大股で玄関の前に進むと、呼び鈴を鳴らした。ほどなく、足音が近づいてくるのが聞こえた。しっかりした男の足音だ。ひょっとしたらノーラ・サザリンというのは、とある中年肥満男のペンネームなのかもしれない。

ドアを開けたのは男だった。いや男ではない——少年だ。チェックのパジャマのズボンと、麻紐に小さな銀の十字架がぶら下がったネックレスだけを身につけ、眠そうな笑みを浮かべてザックを見つめている。

「十九ですよ」

少年が言った。アメリカ南部のアクセントだ。

「十六じゃなくて。ノーラがサブカル向けに僕が十六だって言ってるだけです」

「サブカル向け？」

ザックは十代のインターンの噂が真実だったことに呆然とした。

少年は日焼けしてそばかすのできた肩をすくめた。

「ノーラの言葉です。僕はウェスリー・レイリー。ウェスって呼んでください」

「ザカリー・イーストンだ。君の……雇い主？……に会いに来たんだが」

ウェスリーという名の少年は笑い、若者らしい物憂げな様子で、ひと筋の濃いブロンドの髪を茶色の目から払いのけた。

「僕の雇い主にはすぐに会えますよ」

彼が大げさな南部なまりでコミカルに言う。家に入ると、そこは居心地よく家庭的な住まいだった。背もたれまで詰め物がされたソファ、本があふれそうな書棚。

「あなたのアクセント、いいですね。イギリスの方ですか？」

「過去十年ロンドンに住んでいた。君も地元の間人ではなさそうだな」

「ケンタッキーです。でも母はジョージア出身で、このなまりの出所はそっちです。消そうとがんばってるんだけど、ノーラはだめだって言うんだ。なまりフェチらしい」

「そいつは悪い前触れだ」

ザックは言った。ウェスリーはたたまれた洗濯物の山からVネックの白いTシャツをつかみ、頭からかぶった。細いけれど筋肉質のその体を、ザックは見つめた。なぜノーラ・サザリンはわざとらしいインターンで面倒を起こしているのか。十九歳の愛人は、三十三歳の女にとっては外聞が悪いかもかもしれないが、法的には問題ない。

ウェスリーはザックを連れて短い廊下を進み、ノックもせずにドアを開けた。

「ノーラ、ミスター・イーストンが来てるよ」

ウェスリーが脇によけた。悪名高いノーラ・サザリンを初めて見たザックは、驚いて目をしばたいた。

これまで耳にしたさまざまな噂から、赤い革に身を包んで乗馬用の鞭を振りまわすアマゾネスっぽい感じの女を予想していた。ところが、目の前にいるのは色白の小柄な美人だ。ウェーブのかかった黒髪をうなじのところでゆったりと結び、赤の皮革などまったく見当たらない。彼女は男物のパジャマを着ていた。小さな黄色のあひるらしきものが一面に散らされた青いパジャマだ。

彼女は脚をデスクにのせ、キーボードを膝の上に危なっかしく置いていた。すばやい指の動きでタイプしている。何も言わず、魅惑的な横顔をこちらに向けるのみ。

「ノーラ？」

ウェスリーが促した。

「“突く”のいい同義語の名詞形を最初に思いついた人に、百ドルをピン札であげる」

彼女は言った。その声は甘ったるくも冷笑を帯びている。

ザックは彼女の尊大な態度と、不幸を招きかねない魅力にいらいらしていたが、頭の中の充実した類語辞書をスクロールせずにはいられなかった。

「ひと押し、突進、押し込み、侵攻、ねじこみ、一撃」

次々とまくし立てる。

「“彼のゆっくりとした容赦のない一撃に、彼女はめまいを……”」

彼女が言う。

「なんだかボクシングの実況みたい。なんで“突く”にいい同義語がないの？ もう、身の破滅だわ。でも……」

彼女はキーボードを脇に置いて、初めてザックのほうを向いた。

「ボキャブラリーの豊富な人は大好きよ」

まれに見る絶世の美女に微笑まれ、ザックの背筋が硬直した。彼女は立ち上がり、裸足でザックのほうへ歩いてきた。

「ミズ・サザリン」

ザックは差し出された彼女の手を取った。

「はじめまして」

小柄な体にもかかわらず、彼女は驚くほど力強い指でザックの手をつかんだ。

「すてきなアクセントね」

彼女が言う。

「古いリバプール方言が少し残ってない？」

「下調べをなさったようですね」

ザックは答えた。こちらが向こうを知る以上に、向こうがこちらを知っているらしいことに困惑する。彼女の経歴書をごみ箱に放りこんだことをいまになって後悔した。

「しかし、リバプールに生まれた者がみな、若きポール・マッカートニーのように話すわけではないので」

「残念」

彼女はささやき、ザックを見つめ続けている。

「すごく残念だわ」

ザックは無理やり彼女と目を合わせた。だがやめておけばよかった。初めは緑色に見えた瞳が、まばたきすると黒に変化する。彼女はザックの顔しか見ていないのに、その貫くような視線で身ぐるみ剥がれたような気分だ。

この場の主導権を取り戻す決意をして、ザックは手を引っこめた。

「ミズ・サザリン——」

「わかってる。仕事ね」

彼女はデスクに戻った。ザックは彼女のオフィスを見まわした。さらに多くの本がある。本にノート、紙の山、木製のファイリング・キャビネット。

「ひとつ訊いてもいいかしら、ミスター・イーストン？」

彼女はデスクの椅子に腰を下ろした。

「あなたって、ひょっとしたら、ユダヤ人であることを恥じてる？」

「なんだって？」

彼女の言葉を正しく聞き取れたかどうか自信がない。

「ノーラ、やめなよ」

ウェスリーがたしなめた。

「ちょっと興味があるだけ」

彼女は無頓着に手を振った。

「あなたはザカリーという名前を通ってるけど、本当はヘブライの預言者と同じゼカライアよね。なぜ変えたの？」

その質問はあまりにも個人的で、まったく彼女の関するところではないので、ザックは答えてやる自分が信じられなかった。

「僕は生まれた日からザック、またはザカリーと呼ばれている。本当はゼカライアという名前だということは、公的な書類に記入するときしか思い出さない」

ザックは冷静で平板な口調を保った。落ち着きを失わなければ、なんとかこの場で勝てる。彼女の思うつぼにはまっていきりたつわけにはいかない。

「そして目下僕が恥じているのは、自分のキャリアにおけるこの突然の凋落だけだ」



たじろぐか、嘸みついてくるだろう、そう思った。しかし彼女はただ笑った。

「あなたを責めることはできないわね。そこにかけて、そのあたりのことぜんぶ聞かせて」

ザックは彼女のデスクと向かい合うように置かれた、ペイズリー柄の古びた安楽椅子に、用心深く腰をかけた。膝の上に足首をのせようとして、床に置かれていた黒の細長いダッフルバッグに足が当たった。金属と金属がぶつかり合うぞっとする音が聞こえた。

「僕、授業に行くね」

ウェスリーは出ていきたくてしかたなさそうだ。

「いい？」

「あなたが出ていった瞬間、ミスター・イーストンがデスクで私を陵辱することはないと思うわ」

彼女は言い、ザックにウインクをした。

「残念ながら」

その言葉とウインクで、まさにその行為をしているイメージがザックの頭に浮かび上がった。ザックはすみやかにその思考を締め出した。ウェスリーがあきれた顔で笑いながら首を振る。

「ミスター・イーストン、幸運を祈ります」

ウェスリーは出ていった。ザックは彼の後ろ姿に目をやった。この女性とふたりきりにされて、うれしいのかどうかよくわからない。

「息子さんなのかな？」

ザックはウェスリーがいなくなってから言った。

「うちのインターンってとこ。料理もしてくれるから、どちらかという雑用係かしら」

「下僕とか」

ザックは豊富なボキャブラリーを再び活用した。

「しかもよく仕込まれているようだ」

「仕込まれてる？ ウェスリーが？ ええ、すごく仕込まれてるのよ。私とファックすることも教えこめないくらい。でも、あなたがはるばるニューヨークからやってきたのは、うちのインターンの話をするためじゃないわよね。あの子かわいいけど」

「もちろんだ」

ザックはそこで黙った。ノーラ・サザリンは椅子に寄りかかり、不安な気持ちにさせる目でザックを観察している。

「それに……」

彼女が口を開いた。

「あなたが私を好きじゃないのがわかるわ。私についていろいろ聞いてるってことね。私はあなたの予想どおりだった？」

ザックは彼女をじっと見つめた。最近一緒に仕事をした作家は、五十代と六十代でいずれも男性だった。そのうちひとりとして、パジャマ姿を見かけたことはない。それに、ノーラ・サザリンのように、不安になるほど心奪われる作家には会ったことがない。

「予想より背が低い」

「ピンヒールに感謝だわ。それで、評決は？ J・Pは、私と本に関して、あなたに全権を与えたんですってね。私を支配する男がいるなんて、ずいぶん久しぶりだわ」

「評決はまだ決定していない」

「気を持たせる陪審ね。再審を命じたほうがいいわよ」

「君はとても賢いな」

「あなたはとても男前よ」

ザックは座り直した。作家からお世辞を言われることにも慣れていない。

「ほめ言葉ではない。賢さはアマチュアの最後の頼みの綱だ。僕は自分の手がける本には、深みと、情熱と、実質を求める」

「情熱なら持ってるわ」

「情熱はセックスと同義語ではない。確かに君の本はおもしろいし、長所がまったくないわけではない。からむ肉体にハートが感じられる場面もあった」

「“しかし”がありそうね」

「しかし、ハートの鼓動はかすかだった。患者は臨終かもしれない」  
彼女はザックを見て、目をそらした。僕は計画どおり、彼女を怖がらせて遠ざけた。なぜすっとした気分にならないのだろう。

「臨終……」

彼女は再びザックのほうを向いた。その目に新たな表情が光っている。

「もうすぐイースターね——復活の季節」

「復活？ 本気か？」

ザックは彼女の粘り強さに驚いた。

「僕は六週間後にロイヤル社のロサンゼルス支社に行く。重大なプロジェクトにかかわるには六週間じゃ足りない。だが僕らには六週間しかない」

「たったいま六週間じゃ短いつて言ったじゃ——」

「だが僕が割けるのはそれがすべてだ。六週間で直して印刷にまわす。もしも——」

「もしも仕上がらなければ、淫売作家は淫売宿に逆戻り？」

ザックは驚いて押し黙り、彼女を見つめた。

「J・P・ボナーは出版界で最強のおしゃべりよ、ミスター・イーストン。あなたが私をどう思っているか、彼から聞いたわ。私が失敗するとあなたが思っていることも」

「それは確信している」

「あなたが私の編集者なら、私の失敗はあなたをも引きずり下ろすことになるわね」

「僕はまだ君の編集者ではない。僕は何にも同意していない」

「することになるわ。ところで、あなたはどのようにして教えるのをやめたの？」

「教えるのをやめた？」

「あなたはケンブリッジの教授だったでしょう？」

「十年も前のことだ」

ザックは彼女がどれだけ自分について知っているのかと、ショックを受けた。いったいどうやっ

てケンブリッジのことを知ったんだ？

「それを、どうして辞め——」

「なぜ僕の私生活が君にとってそんなに魅力的なのか、わからないな」

「私は猫なの。あなたはぴかぴか光るもの」

「しゃくにさわる女だ」

「でしょう？ 誰かにお仕置きしてもらわないと」

彼女はため息をついた。

「脇道にそれたわ。私の本のどこが悪いか、教えてちょうだい。ゆっくり言って」

彼女はにっこりした。

「君は編集作業を非常に楽観視している。自分の作品の脈動する心臓部を、十から二十ページをカットしろと言われてたら、君はなんと言う？」

彼女はしばらくのあいだ何も言わなかった。ザックから目をそらし、闇の中で迷っているように見える。彼女が鼻からゆっくりと息を吸い、ふと止めて、口から吐き出すのが見えた。そして彼女はその神秘的な緑色の目をザックに向けた。

「そのときは、“その脈動する心臓は、かつて私のこの胸から切り取ったのだ”と言うわ」

彼女は軽薄さのみじんもない声で言った。

「聞かせてくれ。なぜそんなに僕と仕事をしたがる？」

「この本は」

彼女は言いかけてやめた。一度上げた脚をデスクから下ろし、椅子の上であぐらをかき。一瞬、彼女はとても真剣で、やたらと幼く見えた。

「本がどうした？」

彼女は目をそらした。言葉を探しているようだ。

「この本は……私にとって、とても大事なの。いままで書いた卑猥な話とは別物なのよ。私がロイヤル社に出向いたのは、この本に最善を尽くす必要があるから」

彼女はザックの目を見て、不真面目さや浮かれた様子をまったく見せずに言った。

「お願いします。あなたの助けが必要なの」

「僕は真面目な作家としか仕事をしない」

「私は真面目な人間じゃない。それはわかってる。でも真面目な作家よ。執筆は私がこの世で真剣に受け止めるふたつのうちのひとつよ」

「もうひとつは？」



「ローマ・カトリック教会」

「話は終わったようだ」

「だったらあなたは大した編集者じゃないってことね」

彼女はドアへ向かうザックを嘲笑った。

「結末にいたるのが早すぎる。編集者じゃない私でもそれくらいわかるわ」

「ミズ・サザリン、君は明らかに、自分の作品に感情的にのめりこんでいる。書くのはいいが、好きな本の編集をするのは傷つくぞ」

「痛いことをするのは好きよ」

彼女はザックにチェシャ猫のような笑みを見せた。

「J・Pはあなたを最も優秀だと言ってた。私もそのとおりだと思ってる。あなたが言うことなら、どんなことでもするわ。ひざまずいて頭を下げろと言うなら、そうする」

「もう失礼する」

「何をすればいいか言って。なんでもするから」

彼女が声をあげた。ザックはその粘り強さにつくづく感心した。それに報いてやろうかと考えている自分が信じられない。

「作家は書くのが仕事だ」

ザックは再び彼女のほうを向いて言った。

「僕のために、何かいいものを書いてみろ。長さもテーマも自由だ。僕をうならせるものであればいい。時間は二十四時間。プレッシャーの下で創造が可能なことを見せてみろ。そしたら考えよう」

「プレッシャーの下で私に何がやれるか知ったら驚くわよ」

彼女は言ったが、ザックは信用していなかった。あの下僕といい、ジョークといい、軽薄な態度といい、真面目な作家であるわけがない。

「ほかに提案は？」

彼女が言った。今度は少しばかり真摯に見える。

「知っていることを書くのはやめて、知りたいことを書くんだ。そして」

ザックは彼女に人差し指を突きつけた。

「お得意の安っぽい色仕掛けはなしだ」

彼女は背筋を伸ばした。まるでザックがついに彼女にこたえる侮辱語を見つけたかのように。

「安心して、ミスター・イーストン」

彼女は厳しい非難の口調で言った。

「私の“色仕掛け”はぜんぜん安っぽくないから」

「だったら証明するといい。二十四時間ある」

彼女は椅子の背に寄りかかり、微笑んだ。

「二十四時間なんてかかるもんですか。今夜には届けるわ」

ザックは編集者として、しばしば作家に、深く掘り下げること、明らかなものを打ち捨てること、あらゆる文に完璧な言葉を見つけることを強いる。そして、出席を強いられたこの発刊記念パーティーを表現する完璧な言葉は？ “無関心”だ。

ときおり同僚たちに挨拶する以外、口をきかずにパーティー会場の中を歩きまわった。この場に来たのは、またもやJ・Pに圧力をかけられたからだ。主賓のローズ・イーヴリーはロイヤル社の作家となって三十周年を迎えたという。しかし、なんとぼかぼかしいパーティーだろう——明かりを落としてナイトクラブのような雰囲気醸し出そうとしているが、ありふれたホテルの宴会場は依然として無味乾燥な箱にすぎない。ザックはホールの隅にある螺旋階段のほうへ移動し、こっそり腕時計をチェックした。二時間も我慢すれば、社交好きのボスも文句を言わないだろう。

人混みに目を走らせると、ザックのアシスタントである二十八歳のメアリーが、新婚の夫をしきりにダンスに誘っているのが見えた。ロイヤル社に来て最初の週、ザックはかんしゃく持ちのアシスタントが、自分と同じユダヤ人だと知って喜んだ。J・Pはローズ・イーヴリーと一緒に立っている。ふたりともそれぞれの連れ合いと何十年も幸せな結婚生活を送っているが、J・Pは、文学についてのとりとめのない話を聞いてくれる忍耐強い女性には、礼儀正しく粉をかけるのを忘れない。この悲惨なパーティーを誰もが楽しんでいるように見える。なぜ僕は楽しめないのか。

ザックはもう一度腕時計を見下ろした。

「救い出してあげましょうか。よかったら」

頭上から声がした。振り返って見上げると、階段のいちばん上から、ノーラ・サザリンが微笑みながら見下ろしていた。

「僕を救い出す？」

彼は目を細めて疑問を呈した。

「このパーティーから」

彼女はザックに向けて人差し指を曲げてみせた。

階段をのぼっていくのは非常にまずいと、わが分別が確かに警告している。ところがザックの足は敗北を喫した。ザックは階段をのぼり、てっぺんの踊り場にいる彼女に近づいた。眉を引き上げ、彼女の装いに非難の目を向ける。その日の朝、彼女はだぶだぶのパジャマを着て、豊かな個性以外のあらゆる部分を隠していた。それがいまは、ザックの頭が想像するしかなかったも

のが、すべて見えている。

着ているものはもちろん赤だ。緋色のドレスの裾は太腿のいちばん上、身ごろの上端は胸の際にある。その驚異的な曲線美は、ドレスに重ねた、床まで届く長さのドラマチックな赤のジャケットにも隠れていない。そして、膝上まで紐を編み上げた黒い革のブーツ。ザックはそうとう久しぶりに、“無関心”以外の何かを感じた。

「ミズ・サザリン、僕がこのパーティーから救い出されたいと思っていることが、どうしてわかった？」

ザックは手すりに寄りかかり、腕組みをした。

「この小さな見はり台からずっとあなたを見ていたの。あなたが入ってきた瞬間から。四人に対して五言くらい話したわね。腕時計を三回チェックした。そして、J・Pに何かささやいた。彼の表情から推測すると、あれは“殺す”という脅迫ね。あなたは自分の意思に反してここに来てる。私があなたを連れ出してあげるわ」

ザックは自らを卑下する微笑みを浮かべた。

「残念ながら君の言うとおりで。僕は自分の意思に反してここに来ている。しかし不思議なんだが、そもそもなぜ君はここにいるのかな。僕は宿題を与えなかったか？」

ザックは、自分を感心させるチャンスを一度だけ彼女に与えようという、今朝の早まった決断を思い出して言った。

「もらったわ。私はいい子だからもう終わらせたの。見る？」

ザックは目をそらそうとしてしくじった。彼女がドレスの身ごろの中に手を入れ、折りたたまれた紙を取り出して、ザックに手渡した。まだ彼女の肌のぬくもりであたたかい。

「これが？」

ザックはたった三つのパラグラフを見て尋ねた。

「生みの親を見て作品を判断しないで。読んでよ」

ザックはもう一度彼女に目を向け、そうしたことを後悔した。彼女を見るたびに、心惹かれる別の何か必ず見つかる。彼女のジャケットは腕を滑り落ち、白い彫像のような肩がのぞいていた。彫像？ 僕の小柄な作家はみごとな曲線美とともに、それなりの筋肉も持っていた。彼女は見

た目よりもタフなのだ。

ザックはわれに返り、彼女に背を向けて、その紙を明かりの下で傾けて読んだ。

ザックは天井を見上げた。僕はいったい何に身を投じようとしている？ ノーラ・サザリン……ロサンゼルスに向けて出発するまで、残された時間はたった六週間だ。なぜ僕は、ノーラ・サザリンとその作品にかかわってもいいかと思い始めている？ 理由はわかっている。いま僕の人生には、ほかに何もないからだ。少なくとも、ノーラ・サザリンと仕事をする事で、自分の悲惨なありさまから目をそらせるかもしれない。後悔しないだろうか？ すでにしている。

「君と仕事をすれば僕のキャリアに傷がつきかねない。それはわかっているだろうな」

ザックは言った。

「僕の専門は文芸小説で――」

「文芸小説？」

「自分がこんなことをしているのが信じられないよ」

ザックは首を振った。

ノーラがぐっと身を寄せてきた。不意に、不愉快なことに、彼女のむき出しの首の長い線が意識された。彼女は温室に咲く花のようなにおいがする。

「私は信じられるわ」

ノーラは吐息混じりにザックの耳にささやいた。

ザックはゆっくりと息を吐き、不本意ながら彼女から離れた。

「僕は残酷な編集者だ」

「残酷なのは好きよ」

「まるまる一冊書き直しをさせるぞ」

「もう私を興奮させようとしてる？ やりましょうよ」

「いいだろう」



ザックはついに言った。

「さあ、僕を救出してくれ」

「もしもパーティーを抜け出したことでJ・Pからお目玉を食らったら、私の本に取りかかるために私が言い出したことだと言って」

「帰るならちょっと挨拶をしなければ」

「それはだめ」

ノーラが言う。

「パーティーを抜け出すときにさよならは言わないの。そうやってあなたの居場所に謎を残すのよ。みんな私たちと話をするより、私たちのことを話の種にするほうが、ずっと楽しいわ。もう聞こえてこない？ “ザック・イーストンがノーラ・サザリンといま出てったわよ。あのふたり……ひよっとしたら……”」

「僕らはそんな関係じゃない」

ザックはきっぱりと言った。

「それは私もあなたも知ってることだけど、みんなは知らないわ」

ザックは会場を見まわした。そこらじゅうにこちらをひそかにうかがっている目があった。いちばん強烈な視線はトーマス・フィンリーだ。ザックと最もそりの合わない同僚。フィンリーがザックよりもノーラを見つめていることに、ザックは気づいた。

「ゴシップネタにはなりたくないな」

ザックは言った。

「手遅れね。少なくとも私とあれば、かなり上等のゴシップになるわ」

彼女は一步ごとに大胆に足を蹴り出して、階段を下りていった。

窒息しそうなパーティーからようやく解放されたザックは、コートをはおると、すがすがしい冬

の宵の空気を吸いこんだ。

まもなくタクシーがノーラの前に停まり、彼女は優雅に乗りこんだ。黒いブーツの脚が車内に消え、ザックは鋭く息を吸った。僕はいったい何をしようとしているのか——もう一度自分に尋ねてから、彼女の隣に乗った。

ザックが同乗してもノーラは何も言わず、ただ首をめぐらせて夜の街を見ている。

ザックは落ち着かず、かつて結婚指輪がはめられていた指をさすった。ノーラが手を伸ばしてきて指をつかみ、眉を引き上げて問いかけた。

「グレースだ」

ザックは答えた。

ノーラはうなずいた。

「プリンセスと結婚していたのね」

プリンセス・グレース——彼女の母親は娘をそう呼んでいた。

「妻はプリンセスと呼ばれるのが嫌いなんだ」

声に苦悩がにじんでしまった。

ノーラはザックの手を持ち上げて、自分の喉に押しつけた。あたたかく柔らかな肌を通して、彼女の脈が伝わってくる。

「ソルンよ」

彼女は言い、ザックの目を見た。その黒く危険な深みに、ザックはかすかに何か人間らしいものを見た——単なる共感ではなく、感情移入を。そしてザックはそれに対して人間らしくないものを感じた——情熱ではなく、純然たる獣の欲求を。その一瞬、ザックは自分の両手が彼女の太腿に食いこみ、彼女のブーツが背中に当たるのを想像した。そして人の心を読む彼女の不気味な能力が、ザックの飢えた目の中にそのイメージを見る前に、視線を引き離した。

※こちらのファイルは【試し読み版】です。続きは書籍でお楽しみください。

Erotica エロティカ 溢れる欲望、極限の愛。

**世界中のロマンス読者が絶賛！**  
胸が苦しくなるほど切ない、  
支配される日々官能ラブストーリー

15歳で知った  
背徳



セイレーンの涙  
見えない愛につながれて  
ティファニー・ライス  
藤峰みちか 訳

結婚指輪の  
かわりの首輪

19歳の美少年に  
かしずかれ…

『セイレーンの涙——見えない愛につながれて』  
著者：ティファニー・ライス  
発売日：2013年9月15日  
定価（税込）：940円  
ISBN：978-4-596-91562-7

【『セイレーンの涙』公式サイトはこちらから】

[http://www.harlequin.co.jp/campaign/erotica\\_sep.html](http://www.harlequin.co.jp/campaign/erotica_sep.html)

【電子書籍の購入はこちらから】

[http://www.harlequin.co.jp/hq/books/detail.php?product\\_id=6217](http://www.harlequin.co.jp/hq/books/detail.php?product_id=6217)

セイレーンの涙【ザック編】

<http://p.booklog.jp/book/75696>



THE SIREN

by Tiffany Reisz

Copyright © 2012 by Tiffany Reisz

All rights reserved including the right of reproduction in whole or in part in any form. This edition is published by  
arrangement with Harlequin Enterprises II B.V./ S.a.r.l.

®and TM are trademarks pwned and used by hte trademark owner and/or its licensee.

Trademarkes marked with ® are registered in Japan and in other countries.

All characters in this book are fictions.

Any resemblance to actual persons, living or dead, is purely coincidental.

Published by Harlequin K.K., Tokyo.



<セイレーンの涙> 公式サイト

[http://www.harlequin.co.jp/campaign/erotica\\_sep.html](http://www.harlequin.co.jp/campaign/erotica_sep.html)

著者：（株）ハーレクイン

<http://www.harlequin.co.jp/>

ハーレクイン社 公式facebook

<https://www.facebook.com/harlequin.jp>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ